

# 「澁澤写真」の現場を歩いて

藤 永 豪

FUJINAGA Go

(2006年度調査研究協力者)

## はじめに

はずかしながら、私がおはじめて「澁澤写真」を知ったのは、2003年10月、神奈川大学21世紀COEプログラムのポストドクター研究員に採用された後のことであった。「澁澤敬三」、「早川孝太郎」、「高橋文太郎」、「宮本馨太郎」といった民俗学の先達と業績、そして、彼らが設立した「アチックミュージアム (=屋根裏の博物館)」のことは以前から知っていたが、実際に澁澤写真を目にしたことはなかった。

澁澤写真は、文字通り、澁澤敬三らが、1930年代、すなわち昭和初期に日本国内外の人々の生活や民俗を撮影・記録した写真である。「澁澤写真」の中に現れる事象は、ひとや動物、道具、家屋、集落、耕地、植生、地形、はてはむらびとの行為、しぐさといった生活・文化・風土全般に関わるさまざまな要素から構成されており、当時の地域の様相や民俗を読み取ることができる貴重な資料である。現在、神奈川大学日本常民文化研究所には、この「澁澤写真」およそ8,000点（整理分4000点未整理分4000点）が保管されており、地理学を専門とする門外漢の私でも、その学術的価値は一目で理解できた。本COEプログラムでは、これらを活用した「環境と景観の資料化と体系化」に取り組んできた。その活動は、「澁澤写真」1枚1枚がどこを撮影したものなのか、その撮影場所を同定するという地道な作業から始まった。私もCOE在職中から澁澤写真に関わる調査・研究業務に従事してきた。ここでは、澁澤写真の撮影箇所を探し歩き、その中で感じたことを綴ってみたいと思う。

なお、澁澤写真には撮影対象や撮影地点に関する情報がキャプションとして記載されているものもある。本報告では、そのキャプションも原文のままあわせて示した。

## I 石神斎藤家を訪ねて

私が最初に「澁澤写真」を手に、その撮影場所を探したのは、岩手県の石神である。2004年5月のことで、本学外国語学部の八久保厚志先生（現在は人間科学部）とともに同集落へと向かった。

石神は、言わずと知れた有賀喜左衛門の名著『大家族制度と名子制度』の調査舞台となった地である。有賀は1935年7月31日に石神をおはじめて訪れている。現在は、平成の大合併により2005年に誕生した八幡平市の一部となっているが、当時は岩手県二戸郡荒沢村石神といい、有賀の言葉を借りれば、「荒沢村は安比川の流れに沿うて、南西安比岳を中心とする山岳地方から北東に向かって拡がり、南北の村境は1000メートル前後の山々によって囲まれ、中に安比川の溪谷を作り、その流域に

帯のごとく田圃人家をつらねている。(中略)星沢より新町に到る二里余は溪谷なお狭く、耕地も少ないが、新町近在と石神を含む浅沢地区とは山間の小盆地を形成して、水田はやや開け、これに接する段丘には畑が開墾されて、聚落もまた多い。」と、表現される山間の集落である。実は、有賀の調査の前年、1934年に、澁澤敬三が石神村を訪ねており、これが、その後の有賀の調査・成果に結びつくことになる。このとき、澁澤は斎藤善助家と出会う。斎藤家は、漆製品の製作・生産を手がけ、そのほか田畑や山林での仕事のために、親族も含め、30人以上の使用人とその家族が同居するという、独特の大家族制度を有していた。澁澤は写真と16フィルムを用いて、この斎藤家をはじめ石神の生活の様子を撮影している(横浜市歴史博物館2002)。

写真1はその斎藤家の人々である。右端の人物が当主の斎藤善助氏であり、妻や母、子どもらが一堂に会し写っている。背後の母屋は間口が19間、奥行きが8間ある。しかも斎藤家の1間はおよそ7尺あり、その大きさがうかがい知れる。写真2は現在の母屋であるが、屋根は茅葺きからトタンへと変わり、建物自体も当時と比べると小さくなっている。写真3は現在の当主で、「澁澤写真」をもとに、当時の家とムラの様子について、懇切丁寧に語って下さった。その話を伺いながら、私は1枚の写真に切り取られた遠い昔の山の暮らしに思いを馳せた。そして、雪深い東北の奥山の生活の中で人々はどのような思いを抱き続けてきたのか、私のイメージはさらに写真の外側へと広がっていった。ちなみに、現在、斎藤家の裏手には、八戸自動車道が開通しており、時折、自動車の走行音が響いてくる。写真1に写る斎藤家の人々は数十年後、自家の傍らを高速道路が走り、自家用車やトラックがひっきりなしに通過するようになることを、そして、そのことが農山村を含めた日本全体の生活を大きく変えることになろうとは想像もしていなかったであろう。もっとも、私たちはその高速道路を使って、この石神へやってきたわけだが…。なんとも奇妙な心持ちであった。

(SA3215)



写真1 写真の説明文には「斎藤家大□」とある(一字不明)。(日本常民文化研究所所蔵：写真右上の番号SA3215は同研究所の整理番号を指す。以下の写真も同じ。)



写真2 現在の斎藤家母屋（2004年5月30日撮影）



写真3 現在の斎藤家当主と（2004年5月30日撮影）

## II 喜界島を訪ねて

再び、「澁澤写真」の現地確認に出かけたのは、2006年11月のことであった。神奈川大学日本常民文化研究所の香月洋一郎先生よりお誘いいただき、鹿児島県の喜界島を訪問する機会を得た。喜界島は鹿児島市から南へおよそ400kmに位置する隆起珊瑚礁の島である。すぐ西側の海上には奄美大島が浮かんでいる。主要産業の1つは、サトウキビを原料とした製糖業で、島全体をサトウキビ畑が覆っていた（写真4）。澁澤敬三が喜界島を訪れたのは、1936年のことである。アチックミュージアムには同島阿伝出身の民俗学者岩倉市郎が参加しており、喜界島の民俗や文化について、いくつかの著作や資料報告書をまとめている。1990年には、同じく阿伝出身の拵嘉一郎が『喜界島風土記』を



写真4 一面に広がるサトウキビ畑 (2006年11月15日撮影)

著している。

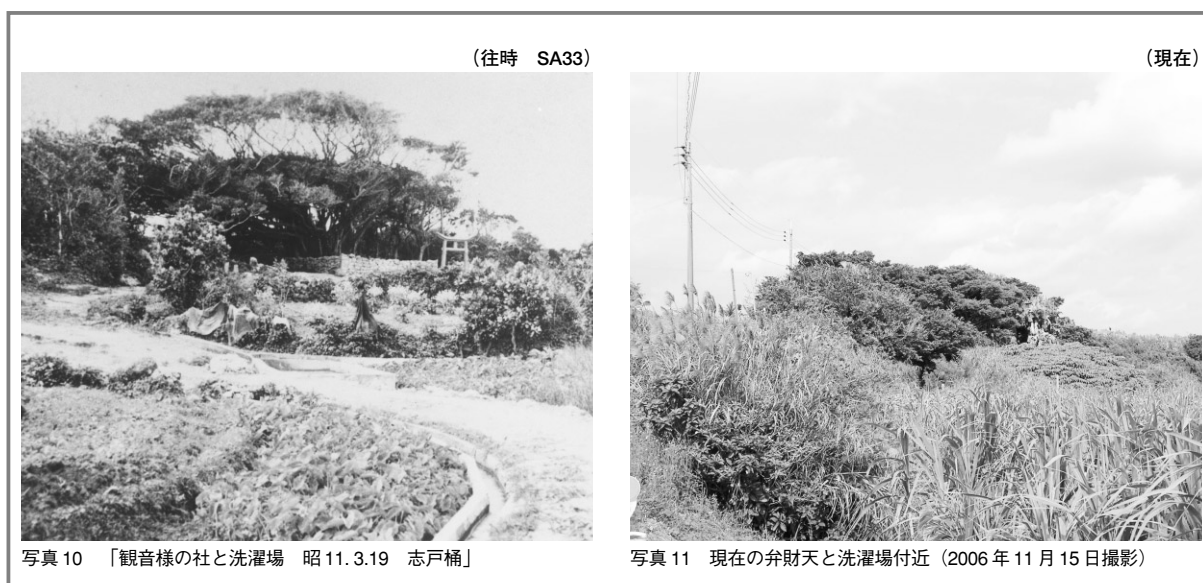
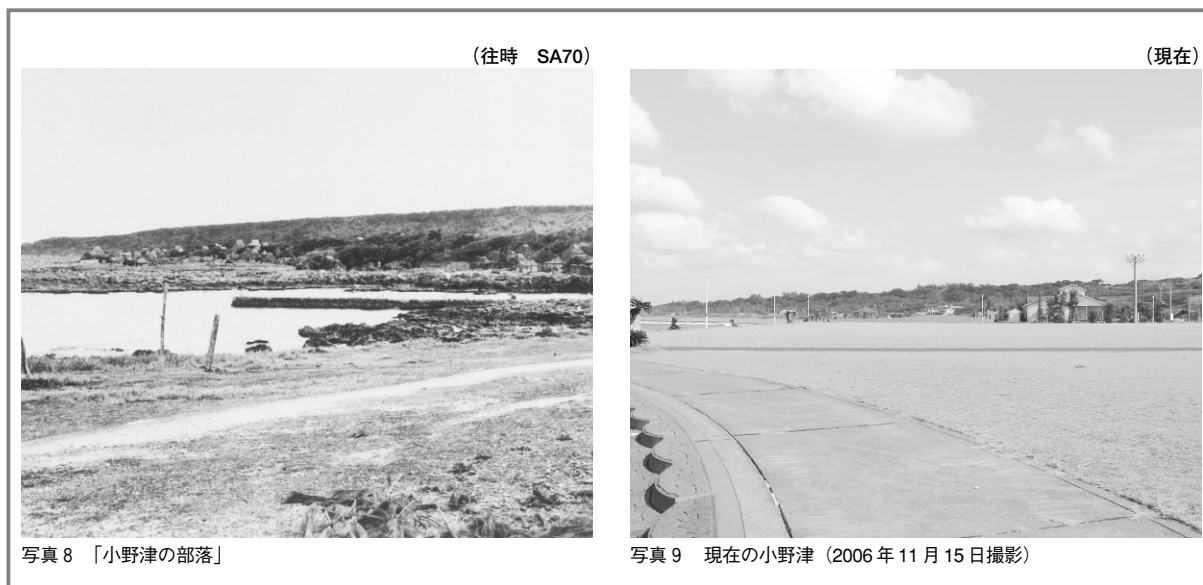
今回の調査は、11月13日から16日までのわずか3泊4日というあわただしいスケジュールの中で行われたが、澁澤写真の撮影地点を何箇所か確認することができた。その中のいくつかを紹介しようと思う。

写真5は喜界島の中心地である湾の通りである。キャプションには「盆の大売出し 於湾」とある。この写真の撮影地点の割り出しには2つの点がヒントとなった。1つは、通りの奥には建造物がなく、港ではないかと推察されること、もう1つは、通りにのぼりがたっているこ



写真7 撰呉服店の跡 (2006年11月16日撮影)

とである。これらの点とキャプションの内容から、撮影された場所は湾港近くの、しかも港に向かう繁華街ではないかというめぼしが立った。もっとも大きな手がかりになったのがのぼりに書かれた「新柄」という文字であった。そのほか「京」という文字も確認された。すなわち、通り最奥部ののぼりがたつ商店は呉服店ではないかと推察された。これを手がかりに調査を進めたところ、案の定、その店は「撰(えらぶ)呉服」という呉服店であることが判明し、当時の店主の娘にあたる方にもお会いできた。その結果、写真が撮影された頃の様子について話を



お伺いすることができ、撮影地点を特定することもできた(写真6)。写真左奥の荷馬が繋がれているあたりは八百屋で、撰呉服の手前の2階建ての店が乾物屋、その手前が理髪店、さらに1軒おいて同じく理髪店、駄菓子屋と並んでいた。現在では左手前の商店がガソリンスタンドに変わり、他の商店はすべて姿を消した。かつて撰呉服店があった場所もすっかり様変わりしている(写真7)。現在の景観からは往時の賑いを想像することはできない。

続いて、写真8は、島北部に位置する小野津の集落である。現在の景観は写真9に示すとおりである。港周辺は整備され、集落の様子もすっかり変わってしまっている。しかしながら、背後の稜線から、おおよその撮影位置が推定できた。このように山の稜線など、改変の少ない指標やランドマークが写しこまれていれば、「濫澤写真」の撮影箇所の同定は比較的容易となる。

写真10は島東部の志戸桶にある弁財天と洗濯場である。キャプションには「観音様の社と洗濯場」と記載されているが、地元の古老によれば、祀られているのは弁財天で、ウェゲー様と呼ばれている。このようなムラの信仰に関わる場所は、現在でも、その景観を大きく変えることなく残されて

おり、とりわけ、老人たちの間では、正確にその場所が記憶されている。そのため、他の撮影箇所と違い、比較的容易に探り当てることができた。写真の中には、鳥居や珊瑚石を積んだ囲い、奥にはひとときわ樹高の高いガジュマルの林が見える。写真中央の方形の囲いが洗濯場である。そして、写真11が現在の景観である。撮影したと思われる道は付け替えられており、おそらく、当時の道は写真右手のサトウキビ畑の中に埋もれていると思われる。この写真は隣接する県道から撮影したものである。ここから鳥居や珊瑚石の囲いは確認できないが、現在も残っている（写真12）。洗濯場もその跡をはっきりと確認できるが、今は利用されていない（写真13）。また、社を覆っていたガジュマルの林は、昭和50年頃の台風によって倒れてしまい、撤去された。生活の近代化や効率化にあわせ景観は絶えず変化し続ける。そして、逆に、変わらぬ人々の思いが過去の痕跡を景観の中に残す。そんな営々と築き上げられてきた島の暮らしの歴史が、今、眺めている過去と現在の景観の間に横たわっているのだ。澁澤写真はそれを見る者に様々なことを語りかけてくる。



写真12 弁財天の鳥居と珊瑚石の囲い（2006年11月15日撮影）



写真13 現在の洗濯場（2006年11月15日撮影）



(往時 SA39)



写真14 「氏神様 (喜界島中里)」

(現在 推定地点)



写真15 かつて氏神様が祀られていたと推察される場所  
(2006年11月16日撮影)

最後にもう一枚、写真14は湾に隣接する中里のある家に祀られていた氏神である。同じ信仰に関する場所でも、先ほどの弁財天とは異なり、氏神などの家毎に祀られたものは特定しづらい。しかも、撮影箇所を確認するための指標やランドマークがまったく存在しない。澁澤写真の中には、このようなものも多い。この場合、現地の人々の記憶に頼って撮影場所を推測していくことになる。本来ならば、中里の集落において、当時どれほどの数の氏神が各家で祀られており、現在、どれほど残されているのか、そういった裏づけ調査を実施して、はじめてその場所が特定されるべきであるが、今回は時間の制約もあり、現地の古老と氏神を祀る家の方の記憶にのみ頼り、おそらくここであろうという結論に達したものである。したがって、この写真の中に見られる氏神の場所は推測の域を出ない。この点は、今後の「澁澤写真」の現地比定における課題となろう。さて、氏神の推定撮影地点であるが、現在は何も祀られていない(写真15)。この家では、家屋の改修工事や周辺の道路工事によって、過去3回、氏神の祭祀場所が変わっている(写真16)。「澁澤写真」の推定撮影箇所は、最初に氏神が祀られていた場所である。こういった細かな、小さな変化も澁澤写真の撮影地同定を困難にする理由の1つである。

## おわりに

以上、限られた時間ではあったが、私は「澁澤写真」の現場を歩く機会を与えられ、現地調査における写真という資料の重要性を再確認するとともに、その楽しさを味わうことができた。澁澤写真を目を細めて眺め、懐かしそうに当時の思い出を生き生きと語る老人たちを見ていると、こちらもついついうれしくなり、調査であることを忘れて、そのとりとめもない話に聞き入ってしまうこともしばしばだった。しかし、このことは決して無駄なことではない。100年近く前の写真に閉じ込められていた人々の思いや感覚は、時間を経ても身体の中に確実に息づいており、決して失われることはない。聞き取り調査をとおして、住民は、かつて自分たちが実際に生きてきた生活世界を写真の中に再確認



写真 16 現在の氏神様 (2006年11月16日撮影)

するのであり、生活者としてのリアルな感覚を取り戻していくことになる。そして、彼ら彼女らの視点の先に、地域を、生活を知るための手がかりとのおおまかな輪郭が浮かび上がってくる。現地に実際に足を運び、住民の方々の話の中に、ムラの生活とその変化を感じながら撮影地点を巡らなければ、澁澤写真の中に現れた、あるいは今日の前にしている景観の深層をつかむことはできない。テレビドラマの中の刑事ではないが、「現場百回」という言葉が思い出される。田口(2006)によればかつて、宮本常一が所長を務めた近畿日本ツーリストの日本観光文化研究所では、日本各地の写真が数点選ばれ、所員たちがその地域はどこなのかを当てるという「写真を読む」という研究会が開催されていた。彼らは5、6分、長くて20分ほどで正解を導き出したという。さらに田口は述べる。このような「読み解きができたのは、全国を実際に自分の足で歩いて見ている」からだ。すなわち、澁澤写真を読み解くためには、撮影地点だけでなく、その他の地域も含めて、自分の足で歩いて、見て、感じるフィールドワークこそが重要なのである。その繰り返しの中で、人々の口からこぼれ落ちる言葉や表現の1つ1つを丁寧に拾い集め、それらを紡ぎ、地域の生活の実像を自分の身体の中に経験として積み重ねていくことで、はじめて、「澁澤写真」の理解と解釈が可能となるのである。

東北のムラで、南国の島で、「澁澤写真」を片手に汗だくになって歩きまわり、ガス欠の原動付バイクを押しながら、そんなことを考えていた。

#### 参考文献

- 有賀喜左衛門 1967.『有賀喜左衛門著作集Ⅲ 大家族制度と名子制度』未来社。  
 拵嘉一郎 1990.『神奈川大学日本常民文化叢書1 喜界島風土記』平凡社。  
 田口洋美 2006. 映像民俗学の可能性と課題. 東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要5:5-19.  
 横浜市歴史博物館 2002.『屋根裏の博物館—実業家澁澤敬三が育てた民の学問—』横浜市歴史博物館。